聖霊降臨後第２０主日（特定２５）　ファリサイ派の人と徴税人のたとえ　２０２２．１０．２３．

先週のたとえ話に続いて今週も福音書は、最初にたとえ話の目的をはっきりと書いています。
「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対して、イエスは次のたとえを話された。」とはっきり言っておられます。

たとえ話に登場するのは、ファリサイ派の人と徴税人の二人です。そして、イエス様がたとえ話で批判する相手は、ファリサイ派の人です。物語のファリサイ派の人は、神殿にお祈りに行って、心の中で、「神様、わたしは他の人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し全収入の十分の一を献げています。」と祈りました。何となく、素直に聞けない、抵抗を感じる祈りに思えます。まさに自分の正しさや、他の人とちがうこと、特に一緒に祈りの場所にいる徴税人を見下げていることが、彼の心の中で祈った祈りに現われています。イエス様は、話を聴きに来ている高慢な人々を、たとえ話を使って、直接批判しておられるのです。聴衆の多くは、ファリサイ派やそれに近い考えを持った人々だったのでしょう。

でも、ファリサイ派の人の祈りは、彼らの信仰熱心のために自然にできあがったものであることを知っておきましょう。私は、ユダヤ教の教え、特に聖書の最初、モーセ五書の教えを学ぶことの大切さを、ユダヤ人の子どもに教えている本を訳しているのですが、何よりも神様を第一にして、そのために聖書を学ぶことを優先している彼らの生活からは、自然と口に出て来る言葉のようにも思えます。

イエス様か活動されたのと同じ時期、紀元１世紀の頃の、あるラビの祈りが、ユダヤ教の教育の伝統的な本の中で出てきます。福音書のファリサイ派の人の祈りとよく似ているので聞いてください。

『わたしの神であり主であるあなたに感謝します。あなたは、私の居場所を、通りの角に座す者たちではなく、学塾に座す者の中に与えられたことを感謝します。わたしも彼らも早起きしますが、私はトーラーの言葉のために早起きする者であり、彼らはくだらない用事のためにそうするのです。わたしは労苦をして報いを受けますが、彼らは労苦をしても何も得ることはありません。わたしも彼らも急いでいますが、わたしは来たる世の命のために急いでいるのであり、彼らは崩壊の地獄のためにそうするのですから。』（ラビ・ネフリア・ベン・ハカナ　バビロニア・タルムード、ベラホート２８ｂ）。

この種の祈りが当時のラビ達の間でよく唱えられていたようです。当時のユダヤ人は、会堂での教育としてラビから教えを受けていたので、多くの聴衆にとっては、このファリサイ派の人の祈りが、ごく当たり前の祈りであったと考えられたでしょう。

それじゃ、どうして、このファリサイ派の人の祈りは、神様に義とされない、受け入れられない祈りだったのでしょうか？

その理由は、ファリサイ派の「ファリサイ」という言葉にその答えがあるように思います。

皆さんは、「ファリサイ」という言葉が、分離を表わす言葉であることを聞かれたことがあるでしょう。

辞書によると、
パリサイという名称の起源は不明である.「分離された者」を意味する〈ヘ〉パールーシュ（アラム語でペリシュ）に由来すると言われるが，それが何から分離するのかは明らかでない．一つの説明は，〈ヘ〉パールーシュは「聖」という語と共に用いられることがあるので，「聖徒」と同じ意味で用いられ，彼らがさまざまの汚れから自らを分離して，きよく身を保とうとしたというものである.

律法に熱心で、汚れから分離して、清く身を保とう、というのは立派なんですが、それは、汚れた人、他の人びとからも分離して、という考えになってきます。それが、今日の福音書のファリサイ派の祈りや、紹介した伝統的な本の中にあるラビの祈りに現われているのです。

それでは、どうして、それが悪いのでしょうか？

たとえば今日の福音書の中では、『わたしは他の人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。』と言っています。

これらは、十戒の後半の、隣人に対する戒めを具体的に挙げているわけです。そして、自分は十戒を守っています、と言っているのですが、それは目に見えるような罪は犯していない、というそれだけのことです。

イエス様は、別の時に、これらの戒めは「自分を愛するように、隣人を愛しなさい」という掟に要約される、と教えられました。律法の根本にあるのは、神様を全身全霊で愛することと同時に、この、隣人を愛することが目的です。

ファリサイ派の人の祈った中にある、「他の人たちのように」とか「この徴税人のような者でもない」という言い方には、このような人々への愛も関心もないことを意味しているのです。そこが、この福音書の祈りの言葉を聞いているだけで、私たちには抵抗を感じる理由でしょう。

それでは、徴税人はどうして義とされたのでしょう？

徴税人は、福音書では、罪人、娼婦、異邦人と一緒に出てきます。汚れている人間の代表でしょう。徴税人は、異邦人のローマ帝国の皇帝のために税金を集めるのが仕事でした。本当の王様である神様を裏切り、偶像であるローマ皇帝に仕えることで、同胞から嫌われました。そして不正な取り立てをして、私腹をこやしていたことも、嫌われる原因でした。加えて、徴税人は、外国との取引による税金を取り立てるために、異邦人との接触が多く、それらのことを考えるなら、このような徴税人が神様から受け入れられるとは、人々は思わなかったでしょう。人間的な基準、そして聖書の律法の基準などで照らしてみると、この人を義としてくれる根拠は何もありません。

そのことは徴税人自身がいちばんよくわかっていました。それでも、家族を養うため、また自分が生きてゆくためには、この仕事を続けるしかなかったのです。

それで、彼はエルサレムの神殿に出掛けました。神殿は、当時のエルサレムの街を見下ろせる、一番高いところにありました。そこに行くには、体力も必要ですし、彼は、ひと目で徴税人とわかる服装だったでしょう。周囲の目も気にしながら、それでも彼は神殿に行かなければならなかったのです。人びとにどのように思われようと、彼は神様から受け入れていただかなければ、立ち上がれませんでした。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」と胸を打ちながら言った。と書かれています。

「祈った」とは書かれていません。彼は目を天に上げようともしないで、そのように神様に言ったのです。私たちには、そんな姿勢はよくあることで、私たちは目を閉じて、下を向いたままで祈ることは普通ですが、ユダヤ人は普通はそうしません。手を挙げて、天を仰いで祈るのです。

ところが、神様はそのような、祈りの形にもならない、この徴税人のつぶやきを、受け入れてくださった、ということが今日の大切なところです。

イエス様の時代よりも１０００年昔、姦淫の罪を犯した人が、それを告白して祈りました。ダビデ王です。彼は預言者のナタンからそれを指摘され、自分の罪を悔やみ、有名な詩編５１編を作りました。

『51:18 もしいけにえがあなたに喜ばれ／焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら／わたしはそれをささげます。 51:19 しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮られません。』

この祈りこそが、神殿で徴税人が語った気持ちに近いものでしょう。神様に受け入れられなければ、私は生きてゆけない、という心境です。これが私たちに必要な祈りの姿勢です。

そして、もう一つ考えなければならないことがあります。私たちが、礼拝に熱心になり、献金をまじめにささげることは、大切なことです。しかし、そのような熱心が、自分を誇ることになり、やがてそれがうぬぼれに変わり、自分の周りで生きている人々を見下げたり、無関心になるような、ファリサイ派の人と同じ心境になってゆく危険をはらんではいないか、ということです。

来月、教区の総会である教区会が開かれます。それを前にして、伝道部からは、毎年各教会の現状や課題などの質問が出て、教会委員会などで検討して回答しました。これらを見るとき、お互いが違う立場の教会から学んで行き、祈り合って行くならいいのですが、お互いを比較し、見下げたり、あるいはまったく無関心になることがないように、と、ファリサイ派の人と徴税人のたとえから、思わされたことでした。